平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（ふりがな）	京都市立石田小学校（きょうとしりついしだしょうがっこう）

校 長 名：平尾隆史

所 在 地：京都府京都市伏見区石田森西24

電話番号： 075-572-1411

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	図画工作

≪研究主題≫

つくりだす喜び，ひびき合う心
～手（試行）と頭（思考）と心（志向）を働かせ，つくる活動を通して～

【研究の要点】

（１） 主題設定の理由

○図画工作科の学習を通して，「心身ともにたくましく心やさしい子の育成」を目指す。

○表現方法を工夫することで，自ら学び，考え，つくりだす力を高める。

○「手」と「頭」と「心」を十分に働かせ，つくりだす喜びを味わうことで教育課程全体を通した「生きる力」の育成を図る。

（２） 研究の重点及び具体的な取組

○図画工作科に関する授業研究を推進する。

○図画工作科と他教科との関わり及び図画工作科から発展した総合的な学習の時間の活用等について研究する。

○地域との連携を図った題材の開発を行う。

（３） 成果と課題

○全教職員が図画工作科の指導の共通理解ができ，そのことが教育課程全体を視野に入れた児童の発展的な学習につながった。

○図画工作科で学んだ事が他教科や生活の中で「生きて働く知恵」として，身についた。

○児童数が年々減少している中，鑑賞の能力を育てるために，縦のつながりを意識した鑑賞の授業を展開していく必要がある。

Ⅰ 研究指定校の概要

１ 学校・地域の特色及び実態

・学校・家庭・地域の強い連携が児童の健やかな成長を担っている。

・体験学習を中心とした学校行事を行うことで児童の自立心が高まってきている。

２ 学校の概要（平成22年4月5日現在）

（小学校の例）※中学校はこれを参考に第３学年までとする。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	育成学級	計
学級数	1	2	1	1	1	2	2	10
児童数	29	37	29	28	40	35	4	202

教員数　　１６ 名

Ⅱ 研究の内容及び成果等

１ 研究主題等

(1) 研究主題

つくりだす喜び，ひびき合う心
～手（試行）と頭（思考）と心（志向）を働かせ，つくる活動を通して～

(2) 研究主題設定の理由

図画工作科の学習を通して，「心身ともにたくましく心やさしい子の育成」を目指す取組をはじめて，本年度は９年次を迎える。

児童は，造形活動が好きで自分の目や心でとらえたものを体全体で表現している。自分らしい思いや願いをもとに，形や色，空間，材料や用具などに働きかけ，具体的な形に表すために表現方法を工夫している。また，作品をつくる過程で，出来上がった作品を児童がお互いに見合いながら，それぞれの作品のよさに気付き心通わせている。このような活動を通して，「手」と「頭」と「心」を働かせ，つくりだす喜びやもてる力を発揮させ，高めていくことで児童に成就感・満足感を味わわせ，「生きる力」につなげていきたいと

考え，主題を設定した。

(3) 取組体制

研究委員会　企画部

学　年　会　低学年部　中学年部
高学年部　育成部

全　体　会

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	○校内授業研究会の充実 →自らつくりだす喜びを味わい，最後までやり抜く子どもを目指し，表現したいと思える題材を研究すること，イメージ通りつくりだす技能を身に付けることに重点を置いて研究を進めた。 →授業を行う上で，教師のサポートと児童に任せる部分の境界線について検討した。できあがった作品と児童の満足度，そして児童についた力などを事後授業研究会で話し合った。 ○図画工作科と他教科との関わりの研究
平成22年度	○教師自ら行う体験活動 →教材研究では，描いてみる・つくってみるを徹底し，児童のつまずきを検討した。 ○校内授業研究の充実 →夏休みに模擬授業を行い，先生が児童役にまわり，児童目線で授業に参加し，意見を出し合った。 ○系統立てた指導法の研究 ○地域との連携を図った新しい題材の開発 ※第61回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会京都大会　全クラス公開授業

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) よりよい授業づくりを目指す

①　校内研究授業の充実

研究の日や夏休みを利用して，校内研究授業を行った。実際の授業を参観する方法と，教師が児童役に回る模擬授業の２種類を行った。授業参観型の時は，個人やグループに焦点をあてて，本時のめあてに児童が到達しているかどうか，細かく分析した。また，グループ内での話し合いの声を拾うことにより，今後の手立てや支援について考えるようにした。

模擬授業では，児童の立場から板書の確認をしたり，教師が実際に活動したりして，授業で児童がつまずきそうなところを分析した。

②　教師自ら行う体験活動

教材研究を行う際に，必ず「描いてみる・つくってみる」を徹底した。

醍醐寺写生会下見では，下見に行った教師が実際に写生を行い，どのポイントから描くとおもしろいか，どこから描き始めたらよいかなど，活動する上でのアドバイスできそうなことを探り，お互いに意見を出し合って，適切な支援について共通理解を深めた。

また,それぞれの担任が指導に当たる前に,作品の製作を行うことにより，児童のつまずきに気付くとともに，必要な支援と，児童に試行錯誤させる部分について研究をすすめた。

今年度はモーターを使用した題材に初めて取り組んだため，全く知識がないところからのスタートということもあり，モーターのつくり方から，モーターを使った作品づくりまで，教師集団で実際につくってみた。モーターとカムの組み合わせと，モーターとクランクの組み合わせの２種類を行い，モーターの可能性を探った。

③　系統立てた指導

６年間通じて身に付けさせたい力と，それぞれの学年で段階的に身に付けさせたい力について整理し，効果的に指導できるようにした。

例えば，工作の学習では「動くおもしろさに出会い，追求し，お互いの作品を楽しむ」という共通のねらいと，「自分の思いを表現していくために必要なスキル」や，「道具との出会い」などを視点に，段階を踏んで成長していく発展的なねらいに分けた。これらを整理することによって，系統立てた6年間の指導ができると考えた。

(2)　考察及び成果と課題

①　校内研究授業では，児童の活動の様子から様々な意見が交換され，模擬授業では，児童のつまずきや必要な支援などについて話し合いをもつことができた。多くの研究授業を実施することを通して，これまで石田小学校が積み上げてきた研究の取組や，新しい先生の斬新な意見，そして指導主事の専門的な意見を全員で確実に共有することができた。

模擬授業については,全国大会に向けて，事前研修として各クラスで授業を行った。授業者も児童役も様々な疑問や驚きに出会い，それらを事後研究で話し合う中で，学

校として一貫した指導が築き上げられた。

② 教師自らが題材や活動を体験することによって，教材研究の充実が図られた。醍醐寺写生会下見をはじめ，教師自ら何度も教材研究を重ねることによって，児童が活動している様子を具体的にイメージすることができた。

そして，児童が乗り越えられそうな課題と，支援が必要な部分を見つけ出すことにより，適切な指導を行うことができた。

例えば，モーターを使った教材研究を進める中では，以下の点に気付くことができた。

一つは，モーターが連続して動くことのよさである。視線を集めたいところに，モーターで動く作品を置くことにより，自然と視線が集まる。例えば，うがいを促す動くおもちゃが手洗い場に設置してあれば，手洗いに来た児童にうがいを促すことができる。このように，連続して動く特性を生かすことにより，作品のイメージを膨らませることができる。

二つには，ＡＣ電源コードをつなぐことで，作品を一斉に動かすことができるという共有性である。グループでテーマを共有することにより，モーターを使った共同製作も考えることができる。

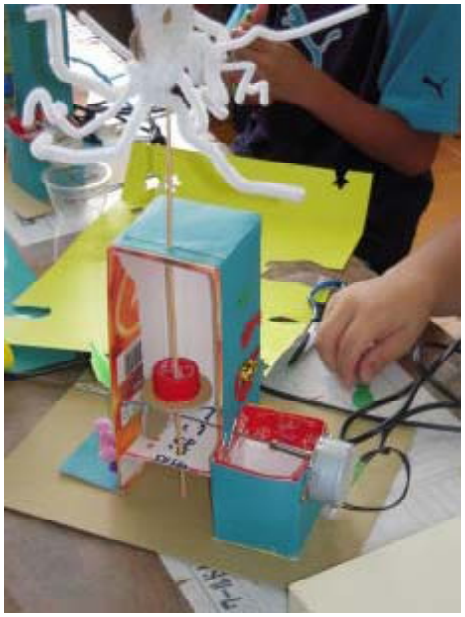
さらに，クランクやカムの仕組みをモーターと組み合わせることにより，今までなかった発想や表現できる可能性が広がることがわかった。今後，進んで取り入れていきたい。

③ 第61回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会京都大会では，公開授業を全学年「工作に表す」にしぼり，研究を進めた。

そして，児童が動きのおもしろさに気付き，イメージし，つくりだす資質や能力を培うことをねらって各学年で具体的な目標を設定して指導した。

例えば，基礎的・基本的な指導については，「切る」という技能で考えると，手でちぎるから始まって，はさみで切る，カッターナイフで切る，サークルカッターで切るというように，学年に応じて児童が使える用具を増やしていく。それによって技能が一人一人の児童の財産として，積み上げられていく。あるいは，仕組みについては，簡単な仕組みから平面的な仕組み立体的な仕組み，そしてモーターへと学年が上がるように系統的に配列する。そのために，１年生から６年生まで教師同士の共通理解を図り，どの学年でどのような技能を身に付

けさせるべきか話し合い，効果的な指導について考えることができた。



３　研究の成果と課題

本校の研究は，児童に知識・技能を身に付けるとともに，学習活動の中で学んだ知識・技能を生かすことによって創造性をはぐくみ，一人一人の資質・能力をいっそう高めようとするものである。同時に，図画工作科で学んだ事が，他教科や生活の中で「生きて働く知恵」になるように，日々の学習活動で生活や生き方との結びつきを意識して研究を進めた。

それによって，児童は大きく変容することが分かった。それは，学力の向上はもちろん，生活の様子，そして一人一人の心の成長が年々よい方向に向かっているという９年間の児童の実態が示している。

例えば，本校の児童の多くは「図画工作が好きですか？」との質問に，多くが「大好き。」と答える。活動中の児童は，お互いがライバルであり，お互いがよい見本になっている。ともに真剣に取り組むことで，お互いを心から認め合えるようになった。背景には「児童が表現したいと思える題材を考える」，「児童がイメージしたものを表現できる技能を身に付けるようにする」，「本物の題材・素材を見たり触ったり感じたりするようにする」，「友達の作品をいろいろな視点から鑑賞し，認め合うようにする」など，指導の工夫がある。それによって，児童の活動は大きく変化し，楽しんで作品づくりに取り組むことができるようになった。

また，研究を通して，全教職員が図画工作科の指導について共通理解することができた。

例えは，我々教師集団が，指導案の作成の仕方や，図画工作科を通して児童にどのような力をつけたいかなど，図画工作科を指導する上での基礎基本を身に付けることができた。また，多くの作品展に参加することにより，いろいろな作品や題材に出会い，表現の多様性に気付くことができた。

課題としては，以下の通りである。

○児童が試行錯誤しながら成長していくために教師側はどのような点に注意して授業を展開するか。

○図画工作科における指導方法工夫改善に関する実践研究について，今後どのように進めるか。

○地域を巻き込んだ鑑賞の授業を展開するためには，どのような方法が考えられるか。

○児童数が年々減少している中，縦のつながりを意識した鑑賞の授業をどのように展開するか。

○モーターなどの新しい材料を進んで授業に取り込んでいき，さらに充実した学習をどのように工夫するか。

図画工作科学習指導案

京都市立石田小学校　指導者　　荒木　宣彦

１．日時　　平成 22 年 10 月 30 日（土）１校時（9:10～9:55）

２．学年・組　5 年１組　男子 23 名　女子 17 名　計 40 名

３．題材名　　「モーターショー」

４.題材目標　・モーターとクランクの動く仕組みを使って，楽しく動くおもちゃをつくるようにする。
・モーターとクランクの動く仕組みに関心を持ち，つくりたいものを発想する。
・イメージに合わせて材料や用具を選び，仕組みが確実に動くようにする。
・表現のよさや工夫について話し合い，お互いを認め合う。

５．題材における評価規準

造形への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
・動く仕組みを生かし，意欲を持って作品をつくろうとする。	・自分のつくりたい動きのイメージを持ち，それに合わせて奥行きや仕組みを考え，作品を構想する。	・自分がつくりたいクランクの仕組みを作りモーターと組み合わせて，形や色・材料を選んで製作する。	・自分や友達の作品を見たり動かしたりして，表現のよさや工夫したところを見つけ楽しむ。

６．　題材について

モーターの動きの面白さは，同じ速度で回転し続けることや，いくつかの仕組みを同時に動かせるところにある。とくに，同じテーマの作品が一斉に動き出すことや，色々な角度から鑑賞することができることは，モーターの大きな魅力の一つである。

クランクについては，回転の動きが前後・左右・交互の動きに変わることや，それらの動きを組み合わせることにより，いろいろな動きをつくり出せるところにある。また，穴の位置や大きさ，竹ひごの長さや回転のスピードなどを変えることにより，イメージや動きが大きく変化し，より自分のおもいにあった作品をつくることができるであろう。

今回，モーターとクランクの動く仕組みを組み合わせることにより，可能性は大きく広がり，子どもの想像力や製作意欲は大きく膨れ上がることが期待できる。

さらに，モーターが持つもう一つの特徴である作品が自動で動くよさを生かすことにより，作品を紹介する際にいろいろな表現を工夫して行うことができるだろう。モーターのよさが工作の面白さを引き出し，工作のよさがモーターの面白さに気付くきっかけになることを期待したい。

7．指導計画（全８時間）

時	学習活動	よさを生かす指導・支援	評価の重点				評価の視点（評価方法）
			関	発	創	鑑	
1・2 発想・構想	○モーターとクランクの動く仕組みの面白さに気付く。 ・うごく仕組みを見て，その動きや特徴を理解する。 ○仕組みを生かした作品を考える。 ・動きから自分のおもいを広げ，アイデアスケッチする。	・クランクの種類やモーターの速度など，できるだけ多くの見本を用意する。 ・色々な角度からみて，動きだけでなく，仕組みにも注目するようにする。 ・イメージを広げるために，視点を変えたり，実際に動かしてみたりする。	○	○			・モーターとクランクの動く仕組みの面白さに気付いている。（活動の様子） ・仕組みを生かした作品を考えている。（アイデアスケッチ）
3（本時）・4・5・6・7 表現	○用具を正しくあつかい，仕組みをつくる。 ○全体の仕上がりまで見通しを持ち，動きの面白さを生かして表現する。 ○イメージが近いもの同士グループを組んで，テーマを決める。	・自分のおもいやイメージを大切にするようにする。 〔共通事項〕ア・イ 動く仕組みが生きるように，色や形・奥行きを大切にしながらつくるように指導する。 ・いろいろな色や材料，質感の違うものを自分のイメージに合わせて選択し，自由に表現できるようにする。 ・実際に動かしてみて，自分のイメージに近いものかどうか確かめるようにする。			○		・モーターとクランクの仕組みを生かして，自分のおもいを表現している。（活動の様子・作品振り返りカード）
8 鑑賞	○自分の作品を紹介したり友達の作品を鑑賞したりする。	・仕組みをどのように生かしているかを紹介する。 ・友達のおもいに共感しながら，作品をみるようにする。				○	・自分の考えやおもいを伝えている。（鑑賞カード，発表の様子）

準備	教師	児童
	画用紙，色画用紙，両面色中厚紙，接着剤，工作マット，割りピン，針金，ドライバー ペンチ，竹ひご，ストロー，きり，モーター 熱融解型接着剤	はさみ，のり，色紙，色鉛筆，コンパス 牛乳パック，鉛筆，セロハンテープ， ホッチキス
	共通：カッターナイフ，身辺材，ぬれ雑巾	

10. 本時のねらい

材料や用具を適切に扱い，仕組みが確実に動くようにつくる。

11. 本時の展開　　（３／７）

学習活動	主な指導○とその支援◆	具体的な評価規準（方法）
○前時までの学習を振り返り，本時学習のめあてを確認する。	○ラフスケッチをみて，前時までの活動を思い出させる。	
用具と材料を正しくあつかい，仕組みが確実に動くようにつくろう。		
○用具を正しくあつかい，仕組みをつくる。 ・リーダーを中心に，クランクづくりの行程を順に進める。 **クランクのつくり方** ①ペンチで針金を曲げる。 ②ドライバーでモーターに装着する。 ③牛乳パックで土台をつくる。 ④わりピン土台にモーターを装着する。 ⑤ストローで部品をつくる。 ⑥竹ひごを上から通して完成させる。	○つくる順序や方法を間違えないように，サンプルや「クランクの作り方」を机の中央において，何度も確認できるようにする。 ◆机間指導しながら工夫しているところを賞賛したりつまずきに応じて助言したりする。 ○用具を安全に扱うために，「クランクのつくり方」の安全に関する部分を必ず読み上げるようにする。 ○針金を曲げるときには，専用の用紙を使うようにする。 ◆うまく針金を曲げられない児童には，友達に協力してもらうように助言する。	〈おおむね満足できる状況〉 【創造的な技能】 ・用具と材料を適切に扱い，仕組みが確実に動くようにつくる。 〈活動の様子・作品〉 〈十分満足できる状況〉 【創造的な技能】 ・用具と材料を適切に扱い，仕組みが確実にスムーズに動くようにつくる。 〈活動の様子・作品〉
○電源を入れて，動きを確認する。	○動きがよく分かるように，竹ひごの先端に紙をつけて動かすようにする。	
○活動を振り返る。	○自分のイメージした動きを獲得できたかどうかについて，振り返るようにする。	

12. 板書計画

用具と材料を正しくあつかい，仕組みが確実に動くようにつくろう。

〈クランクのつくり方〉

①ペンチで針金を曲げる　　②ドライバーでモーターに装着する

③牛乳パックで土台をつくる　　④わりピンで土台にモーターを装着する

⑤ストローで部品をつくる　　⑥竹ひごを通して完成させる

※リーダーを中心に，グループで協力しながらつくりましょう。

※用具を正しくあつかい，安全に活動しましょう。

※できあがったら，先端に紙をつけて動かしてみましょう。

9:52 になったら，
活動を振り返ろう

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	ふくおかしりつみなみとうじんしようがっこう
学校名	福岡市立南当仁小学校

校 長 名：村本　繁

所 在 地：福岡県福岡市中央区鳥飼２丁目４－６１

電話番号： 092-741-8792

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	図画工作

≪研究主題≫

表現活動を通し，思考・判断する子どもの育成
―条件を精選した学習過程の工夫―
―「みる　かんがえる　はなす」鑑賞の活動の試み―

【研究の要点】

◇　研究初年度は思考・判断力育成のために表現段階における条件の精選を行った。その結果「なぜ，それが必要なのか」目的意識をはっきり持って思考する姿が見られ，試行し判断することができる時間と場の保障を行うことで，考えて試したりする児童の姿が見られるようになると考え，以下のような取組を中心に行った。

1　条件を精選した活動

○　子どもたちの表したいことの内容や方法を明確にさせ，思考・判断する力を高めるため，表現における条件を精選する。

条件の精選の例

・　本時のねらい目標の絞り込み
・　用途や目的
・　材料や用具の絞り込み　　など

○　子ども一人ひとりに応じて材料，資料を提示する。例えば，子どもが材料を求めてきたとき，理由を明確にしてから提供する。

2　試行し判断することができる時間と場の保障

○　学習過程に子ども一人ひとり試行し判断することができる場や時間を保障する。

・　学習の場の設定
・　配時の工夫

3　思考の過程を意識させるための図工ノートによる振り返り

○　図工ノートによる振り返りを学習過程の中に位置づける。

振り返り例

・　自分がどのような道筋をたどってそういう活動を行ったのか。
・　他の人はどう考えたのか。
・　友だちの考えを取り入れてさらによくなったところはどこかなど。

○　図工ノートを6年間継続して使わせる。

◇　２年目からは，鑑賞に重点を置き，思考・判断する子どもの育成に取り組んできた。その結果，どの学習段階でも子どもは鑑賞の力を発揮していること，鑑賞には，「正解」も「間違った答え」もないので，どの子も安心してしっかり考えることができるということ，鑑賞の話し合いでは，それぞれの個性やよさを認め合う機会を得，相手の立場になって考えたり，共感することができたりする資質や能力を培うことができるということがわかった。

4　各学習段階における「鑑賞の活動」の設定

○　表現中も，自由に移動しながら行う「発見タイム」や，グループで相互に行う「ミニ見に鑑賞」という鑑賞の活動を設定した。

5　「鑑賞の活動」の進め方の工夫

○　子どもに対する受容的な態度
○　思考を促す言葉を用いる
○　形や色をもとに鑑賞が行えるような視点の持たせ方
○　見付けたよさを伝えるための鑑賞カードの工夫
○　美術館との連携

6　「鑑賞の活動」を活性化させる「学習のデザイン」

○　表現中も自然に鑑賞が行えるような机の配置の工夫
○　異学年を組み合わせての「鑑賞の活動」の設定
○　子どもが対話を始めたとき待つゆとり
○　表現途中の作品も常時見られるよう掲示
○　全校造形作品展の実施
○　異学年の作品を学年掲示板に掲示

子どもたちは，学力では，活用力が伸び，生活面では他者を意識した行動ができるようになってきた。

Ⅰ　研究指定校の概要

1　学校・地域の特色及び実態

本校は，美術的な環境（人・もの・こと）に恵まれている。また，20年間図画工作科を通じて子どもたちの表現力を育てることに努めてきた。

さらに，実態調査から，であいに感動でき，イメージを持つことが出来ること，色や形などについてしっかり考えることが出来ずに活動するため，思いとおりに表現出来ず，その結果自己満足できていないということが分かった。また，生活実態調査からは，「指示待ち」であり，受け身であり，自ら進んで他人と関わることが苦手であるということが分かった。一方，表現が終わったときだけでなく，表現途中も作品のよさを見付けていることも図工の実態調査から分かった。

2　学校の概要（平成22年4月5日現在）

（小学校の例）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	3	4	4	4	3	4	0	22
児童数	104	117	117	117	98	121	0	674

教員数２９名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

表現活動を通し，思考・判断する子どもの育成
―条件を精選した学習過程の工夫―
（21年度）
―「みる　かんがえる　はなす」
鑑賞の活動の試み―（22年度）

(2) 研究主題設定の理由

実態調査から，本校児童は，対象に感動し，イメージを持てても，色や形などについてしっかり考えることが出来ずに活動するため，思いとおりに表現出来ず，その結果自己満足できていないという課題が明らかになった。

そこで，研究の焦点を思考・判断する力にあてた。

更に２年次は，生活実態調査からは自ら進んで他人と関わることが苦手だということ，図工の実態調査からは表現途中も作品のよさを見付けていることが分かった。

そこで，作品をはさんで，人と人の関わっていく活動を仕組めば，自分から他人に関わることができると考えた。また，鑑賞はすべての学習段階で行われていることが分かってきた。

そのため，鑑賞に焦点をあて研究を進め，研究主題を「表現活動を通し，思考・判断する子どもの育成―『みる　かんがえる　はなす』鑑賞の活動の試み―」とした。

(3) 取組体制

校長のリーダーシップのもとで，各学年部を中心とした組織づくりを行った。本校では，１人１役という校務分掌の割り当てをしているため，テーマ推進部は作っていない。そのため，テーマ推進委員長は校長と綿密な打ち合わせを行い，その後全体に提案という形で進めていった。研究は，学年主任を中心とした学年で行った。更に，各学年には講師一人を割り当て，題材を指導するうえでの相談等は，この講師，テーマ推進委員長，学校長に行った。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	4月	・ テーマ研修推進方針・授業研修推進方針の共通理解
	6月	・講師招聘による理論研究及び授業研修
	10月	・中間発表会の実施 本主題による研修の中間発表
	12月	・全校造形作品展の開催 地域保護者に対し児童の作品を通して本校の取組を啓発する。
	1月	・美術館と連携した授業の実施 ギャラリートークの在り方を探る。

	・アンケート実施
平成22年度	４月　・テーマ研修推進方針，授業研修推進方針の共通理解 ６～７月　・講師招聘による理論研究 ・授業研修の実施 ７～８月　・研究発表会に向けて，各部実践報告と指導案の作成 ・基調提案・実践報告作成 10月　・全国向け研究発表会の実施(全学級) 11月　・発表会による課題の整理と授業の改善 12月　・全校造形作品展の開催(地域・保護者対象) １月～・研究解明に向け更なる実践記録

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 条件を精選した活動

【具体的な取組】

○　子どもたちの表したいことの内容や方法を明確にさせ，思考・判断する力を高めるため，表現における条件を精選する。

条件の精選の例

- 本時のねらいや目標のしぼりこみ
- 見立てからのしぼりこみ
- 用途目的からのしぼりこみ
- 材料のしぼりこ
- 資料のしぼりこみ
- 用具のしぼりこみ

○　子どもが材料，資料などを求めてきたとき，その理由を問い，与える。

【成果と課題】

○　表現方法を考えたり，試したりするなど工夫することができる。

○　材料，用具，技法については思いの実現のために技法や材料を教師に求めたり，自分で材料を集めたりして表現に生かしていた。高学年になれば，自分の表現をよりよくする視点で根拠をもつことができる。

○　材料をよく見つめ，形，色などに今まで以上に気付き，発想・構想の広がり，深まりが見られた。

○　なぜ，必要なのか，どんな効果があるのかが明らかになり，その後の活動に生かすことができている。

目的意識を持ち思考する子ども

●　材料を準備する子どもの活動の予想・把握がしにくい。

(2) 試行し判断することができる時間と場の保障

【具体的な取組】

○　試行し判断することができる場を保障した。

- 学習の場の設定
- 机の配置
- 配時の工夫

【成果と課題】

○　表現前も表現中にも思考を深めたり，試したりしていた。

○　友だちと交流し,表現に取り入れている。

試行し，判断する子どもの姿

(3) 思考の過程を意識させるための図工ノート

による振り返り

【具体的な取組】

○　図工ノートによる振り返りを学習過程の中に位置づける。

振り返りの中身

・　自分がどのような道筋をたどってそういう活動を行ったのか，

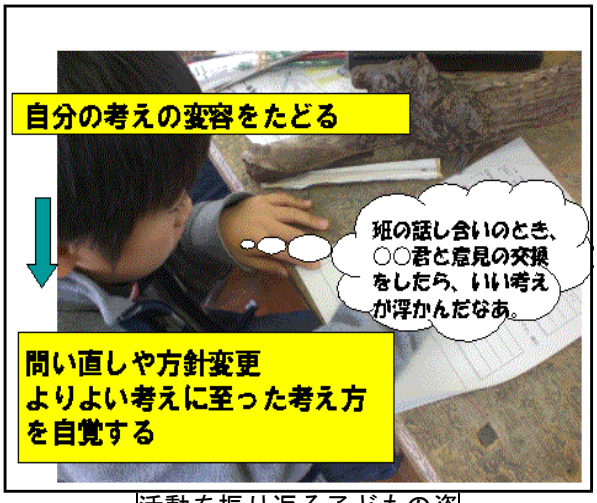
・　他の人はどう考えた。

・　友だちの考えを取り入れてさらによくなったかなど。

○　図工ノートを6年間継続して使わせる。

【成果と課題】

○　振り返りの中で，自分の考えの変容をたどり，自覚することができた。



活動を振り返る子どもの姿

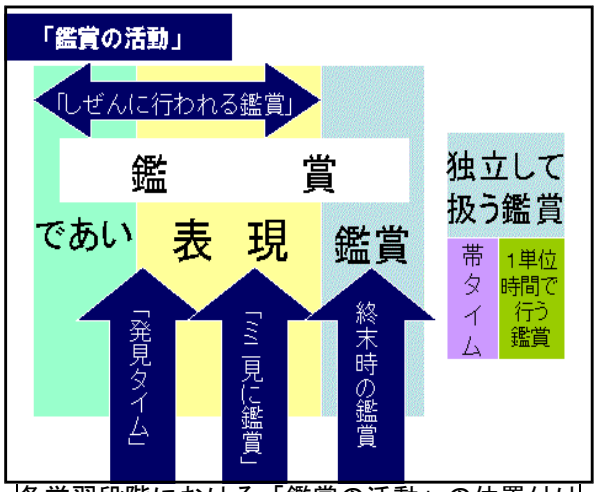
○　成就感を味わい，次への表現意欲を高めることになった。

●　図工ノートにかく視点をさらに明確にする必要がある。

(4) 各学習段階における「鑑賞の活動」の設定

【具体的な取組】

○　終末時や独立して扱う鑑賞だけでなく，表現中も，自由に移動しながら行う「発見タイム」や，グループで相互に行う「ミニ見に鑑賞」という鑑賞の活動を設定した。



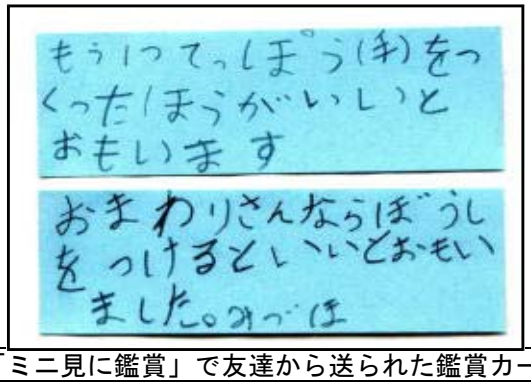
各学習段階における「鑑賞の活動」の位置付け

【考察及び成果と課題】

○　「発見タイム」を設定することで，自由に多くの作品を見てまわり，より多様な友達の表現のよさを発見し，さらに自分の表現に生かす子どもの姿が見られた。

○　「ミニ見に鑑賞」を設定することで，友だちのよさを認めたり，友だちの考え方や工夫を取り入れたりする子どもの姿が見られた。

「ミニ見に鑑賞」前の作品



「ミニ見に鑑賞」で友達から送られた鑑賞カード

「ミニ見に鑑賞」後の作品

※鑑賞カードのアドバイスを取り入れている

○　子どもたちは，経験を重ねる中で，こちらが設定しなくても自分の必要感に応じ自然と「発見タイム」や「ミニ見に鑑賞」を行えるようになってきた。

●　こちら側が設定しているときは，個人によって欲している時間が違うため，時間配分が難しい。

（5）「鑑賞の活動」の進め方の工夫

【具体的な取組】

○　子どもに対する受容的な態度

○　思考を促す言葉を用いる

○　形や色をもとに鑑賞が行えるような視点の持たせ方

○　見付けたよさを作者に伝えるための鑑賞カードの工夫

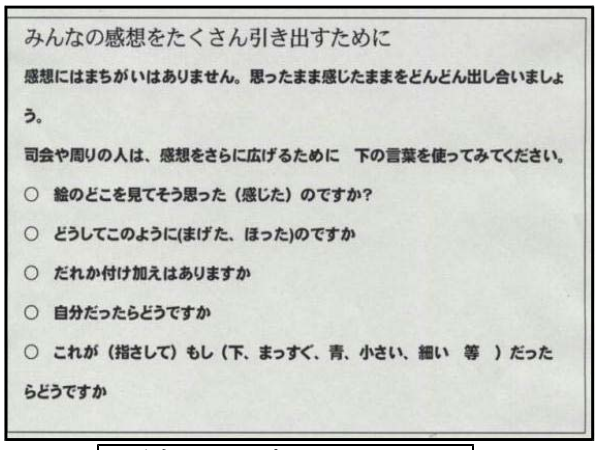
○　美術館との連携

【考察及び成果と課題】

○　子どもの姿から内面が読み取れるようになり，全身を使って鑑賞する子どもの姿を自然に見守ることができるようになった。

全身を使って鑑賞する子どもの姿

○　思考を促す言葉をマニュアル化することにより，子ども同士でもギャラリートークが出来，思考を深めている姿が見られた。



みんなの感想をたくさん引き出すために

感想にはまちがいはありません。思ったまま感じたままをどんどん出し合いましょう。

司会や周りの人は、感想をさらに広げるために　下の言葉を使ってみてください。

○ 絵のどこを見てそう思った（感じた）のですか?

○ どうしてこのように(まげた、ほった)のですか

○ だれか付け加えはありますか

○ 自分だったらどうですか

○ これが（指さして）もし（下、まっすぐ、青、小さい、細い　等　）だったらどうですか

子どもたちに渡した図工ノート

○　カードの工夫により，国語力によって差が出ない鑑賞の活動が出来ている。

●　対話による鑑賞以外の更なる鑑賞の活動の実践を行い，効果を検証していく必要がある。

（6）「鑑賞の活動」を活性化させる「学習のデザイン」

【具体的な取組】

○　表現中も自然に鑑賞が行えるような机の配置の工夫

○　異学年を組み合わせての「鑑賞の活動」の設定

○　子どもが対話を始めたときに待つゆとり

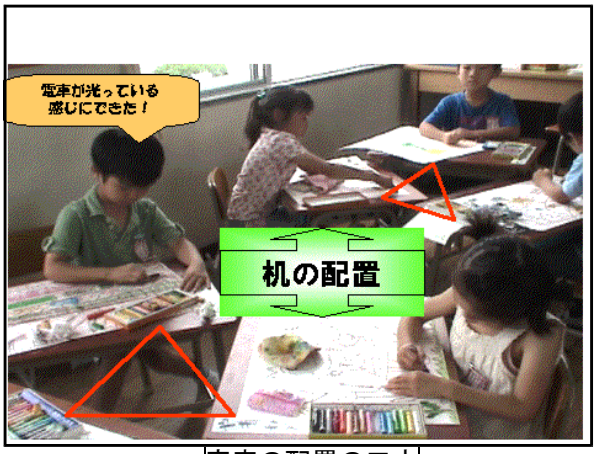
○　表現途中の作品も常時見られるよう掲示

○　全校造形作品展の実施

○　異学年の作品を学年掲示板に掲示

【考察及び成果と課題】

○　座席の配置の工夫も自然に行われる鑑賞を促す上で，とても有効だった。自然と友達のよさや工夫に目が行き，交流が始まっていた。



座席の配置の工夫

○　異学年の組み合わせでは，低学年は思ったことを次々に口にし，上学年がまとめていた。お互いがお互いらしい能力を発揮していた。

異学年の組み合わせで鑑賞する子ども

○　表現途中の作品を常時掲示することで，自然と鑑賞が始まり，表現に生かす姿が見られた。

○　全校造形作品展の実施や異学年の作品を学年掲示板に掲示することで，憧れられる上級生，かわいがられる下級生の関係が自然と出来てきた。

3　研究の成果と課題

○　図工でも絵の部分を根拠に話し合いが進められる姿が見られるようになってきた。対話による鑑賞を重ねる中で友達と話し合うことができ，考えを深めている子どもが増えてきた。

絵の部分部分を根拠に話し合い

○　色々な場面で思考する姿が見れるようになった。教え合ったり話し合ったりする場面が，どの教科でも見られるようになって来た。学力調査では，活用力で特に高ポイントをあげた。

○　生活面でも他者を意識して行動できるようになってきた。病院に搬送するような怪我は，昨年度は，１１６件から５１件にまで減少した。自分本位な考え方をしていた子どもたちが休み時間など学年をこえ，仲良く遊んだり行動したりする姿が見られるようになった。また，給食の残さいは一昨年の２月から０パーセントが続いている。そのほか，特別活動のクラブは，子ども達で企画・運営を行っている。基本的に教師は安全面の配慮だけをしている。また，普段から教室・特別教室（準備室は施錠している。）には施錠をしていない。その中でも，問題行動を起こす子はいない。集会，始業式，終業式の時の体育館への入場は，並んでいくのではなく，時間になると個人個人が直接行っている。遅れた子がいて開始がずれ込むというようなことはない。